

イワナという魚を御存じでしょうか？ 岩魚（いわな）と書くように普通は岩のゴロゴロしている河川上流域の溪流に生息していますが、一旦海に下って、産卵のために再び河川を遡上するものもいることはあまり知られていません。

一般的に、イワナはアメマス（エゾイワナ）、ニッコウイワナ、ヤマトイワナ（キリクチ含む）、ゴギの4つの型に分けられており、主に北海道や東北地方に分布する降海型（一旦海に下って遡上するタイプ）をアメマス、河川残留型をエゾイワナと呼びます。今回はこのアメマスとエゾイワナに関するお話です。

所は三陸海岸に流入する小さな独立河川でのこと、久しぶりに東北のきれいな川での調査とあって、嬉々としてヤマメやアユを捕まえる我々の上流側から一人のおじさんがやってきました。みればおじさんはあやしげな網を携えて、腰には重そうにピックを下げていたではありませんか。鋭い眼光と太い腕にタダナラヌものを感じた私が捕らえた魚を見せてくれるよう頼むと、「今日はあんまり捕れてないけどよー」と言いつつも投げた魚をみてビックリ！何と30cm前後のイワナやヤマメばかりがゴロゴロしているではありませんか。

とくにそのイワナたるや河川残留型のいわゆるエゾイワナで、一目でネイティブとわかる見事な個体で、頬擦りしてチューしたくなるほど美しく、のどから手が出るほど欲しかったのですが、おじさんにねだってもくれそうにありま



せん。「よう～し俺も捕ったる～！」と、調査への意欲がメラメラと燃え上がったことは言うまでもありません。が、しかし、その後もヤマメやアユは

ある日のフィールド・ノートから

イワナとアメマス

たくさん捕れるけど、なかなかイワナは捕れず、どうにかこうにか捕まえたイワナは銀ピカの魚体に大きな白斑がある正にアメマスと呼べるタイプ。ところがこれが20cmくらいのお小さなアメマスで、その後も十数cmのチビイワナを2～3匹と、イワナに関しては貧果に終わりました。

一般に河川残留型よりも降海型の方がはるかに大きくなるのですが、我々の捕ったアメマスが、おじさんの捕ったイワナに及ばないという結果に、職漁師の技もさることながら、あのあやしい網の威力にも恐れいることとなりました。

さてこの諸々の話の中には河川の環

境を評価する上での重要な事実が隠されていることにお気づきでしょうか？

まず、大きさはどうあれアメマスが生息しているという事実、これは海から遡上することができるということ、即ち堰堤等による障害がなく遡河回遊魚の産卵場所として河川が正常に機能しているということを知

実に物語るものでもあります。（もっとも我々の捕まえた小さなアメマスが降海個体となるかは疑問ですが、おじさんの話では大きなアメマスもいるよとのことでした）それともう一つ、放流の一切行われていない小さな川でありながら、でっかいイワナやヤマメがたくさん生息しているという事実。これはイワナやヤマメが大きくなれる生産性の高い河川であるということを反映しています。イワナやヤマメは主に水生昆虫などを補食する肉食性の種のため、餌生

物をたくさん生産し、魚たちが我々のようなへボ調査者や、イワナ取り名人のおじさんから身を守れる隠れ家がたくさんあるというような、豊かな河川でないとなかなか大きくなれないのです。

ただ単にイワナがいた、ヤマメがいたというだけなら簡単ですが、ここにこんなイワナがいて、このイワナが何を語りかけているのか、ということを知りたいなあ～と思いつつ、今後雪辱に燃える今日この頃です。

ちなみに我々の名誉のために言っておきますが、この後の調査では投網1打ちでヤマメを50匹以上捕獲したという「大漁」もあったことをつけ加えておきましょう。（本社調査室・浅尾勝彦）

編集後記

この業界で、少しでも役立つものになればと考えつつ、地道な姿勢で作っていきたいと思います。社内だけでなく、多方面からのご意見も載せられるようなネットワーク的情報誌にできれば本望です。（本社管理室・西邑恵子）

【発行】……………株式会社地域環境計画
編集 西邑恵子・南谷佳世
東京本社
〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル
TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701
営業窓口……………逸見一郎・西邑恵子

大阪支社
〒154 大阪府高槻市古部町1-1-8
TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184
営業窓口……………中山香代子・津田洋子

NEWS LETTER 発刊に寄せて

このたび、弊社のPR誌として「地域環境計画 NEWS LETTER」を発行することになりました。この小冊子は、私たちがフィールドで得た情報や経験を中心に構成し、また、読者の方々の仕事上少しでもお役に立つような情報を掲載するように心掛けました。編集にあたっては、担

当スタッフを初め、社内の執筆者が予想以上に力を入れてくれたおかげで、当初の予定より立派なものになってしまいました。今後もこの第1号に負けないような誌面作りを目指したいと思います。ご声援の程をよろしくお願いたします。

（代表取締役社長・高塚敏）